

	<p>放送大学茨城同窓会会報</p> <h1>ときわ</h1>	<p>発行所 放送大学茨城同窓会(茨城学習センター内) 〒310-0056 水戸市文京 2-1-1(茨城大学内) 発行人 会長 鈴木 和徳</p>
<p>2006.3.31 現在の同窓生数:258名、本会会員数:77名) 同窓会 Web ページ <a href="http://www.it-doctor.jp/dousokai_blog/">http://www.it-doctor.jp/dousokai_blog/</a></p>		

## 新卒業生の皆様へ

茨城同窓会 会長  
鈴木 和徳

春一番が到来し、暖かな日々も多くなってまいりましたが、皆様には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、この度はご卒業おめでとうございます。何かと大変な時世に艱難も乗り越え、見事に栄冠を手にされました。皆様には、このご体験と学業などで身に付けられたことをそれぞれの分野で活かし、新たな境地が開かれるものと思います。

今、放送大学は、放送と通信の融合化の中で新たな発展の胎動期に入っております。しかし、本学は他の大学と連携を強めつつも、ともするとIT化の分野で遅れをとり、他の大学に飲み込まれてしまいかねません。

他の大学には研究部門や産学連携などにウェイトをシフトして頂き、本学は高度教育を受ける機会の国民への均等提供と生涯学習環境の向上に努め、私ども同窓生の知的拠り所としても益々発展して欲しいと思います。

放送大学の同窓会は、他の大学と異なり、全国に母校の学習センターなどがあり、再入学などでの在籍者も多く、また、幅広い属性を持ち、生涯現役の会員も少なくない知的集団でもあります。今、各地区の同窓会で組織している同窓会の連合会が実質的な全国化を目指して会の運営や組織の理想像を模索しておりますが、同窓生が全国どこでもいつでも公平に多くの便益を受けることができることが望ましいと思います。それには、会が、既得権益に縛られずに民主的に運営され、IT活用などによって経費節減に努めつつ楽しく夢の持てる方向を見失わないことが重要と思います。

本会は、発足後、まだ数年の未熟な会ですが、見学会や講演会、発表会、祝賀会などを通じての同窓生や在学生との知的交

流の場として楽しく夢の持てる会となるよう鋭意努力しております。この度卒業をされた皆様には、新しい知的そよ風として本会に活気を持たせ、その便益を十二分に享受して頂きたいと思っております。

## 卒業祝賀パーティに参加

2006年3月11日、同窓会連合会主催の卒業祝賀パーティへの準備及び卒業当日に精一杯手伝いをしてまいりました。

今年は、621名のパーティ参加者で、大過なく、全体の雰囲気も良く、多くの参加者から喜ばれ、また、役員の方皆さんも成功の評価でした。

茨城学習センター関係では、塩見所長様と7名ぐらいの卒業生の方が参加され、皆様と一緒に丹保学長様の所へ行き、記念写真を撮らせて頂きました。

私は、会場の表示物設置や会場への誘導と会場でのお世話の責任者を神奈川同窓会会長さんと一緒に果たしました。

本会からは、堂本一成様と太田幸栄様の誠実なご奉仕があり、パーティへの十分な貢献があったと思います。

(会長:鈴木和徳 記)

## 第18回全国生涯学習フェスティバル 参加における協力依頼について

第18回全国生涯学習フェスティバルのイベントが茨城県において、平成18年10月5日から9日にかけて盛大に実施されます。

放送大学茨城学習センターもいろいろな企画を考えて参加することを表明しております。学習センターから、同窓会、各種サークル団体への協力要請がきております。詳細は、別途、ホームページ等でご案内します。

会員の皆様の積極的なご参加を期待します。

放送大学としての、主なイベントは下記を検討中です。

笠松運動公園における4ブースのイベント出店(放送大学本部からも参加)

茨城学習センター施設内外でのイベント(10月7日午前は2学期入学者の集い・午後からは公開講演会(茨大教育 佐藤先生 ピアノ演奏)、各団体の模擬店等々)

茨城県立図書館でのライブラリー講演会スペシャルバージョン(10月8日放送大学丹保学長、鈴木先生等々)

### 茨城同窓会総会案内

茨城同窓会の総会を下記のように実施します。会員の皆様には、ご参加下さるようお願い申し上げます。

記

1. 日時

2006年4月23日(日)13:00~15:00

2. 場所

茨城学習センター 会議室

3. 議題

2005年度活動報告

2005年度収支決算報告及び監査報告

2006年度活動計画(案)

2006年度収支予算(案)

役員改選

### 「全国同窓会連合15周年記念事業：水戸の歴史と文化を訪ねてー徳川光圀を中心に」成功裏に終了

光圀生誕の地から始まり、弘道館、大日本史編纂の地、薬医門、佐竹寺、西山荘、県立歴史館のルートで水戸の歴史と文化の勉強会が開催された(2005/11/13)。

鈴木暎一先生から、光圀の誕生から西山荘に隠居するまでの、背景や経緯を現代風にアレンジして説明いただき、爆笑しながら勉強した。

水戸の歴史と文化の勉強会終了後、大塚屋さんで黄門様宴膳体験を行った。大塚屋主人より、黄門様宴膳の内容説明ならびに牛乳酒の作り方教えていただいた。牛乳酒は、コレステロール改善、骨折予防になるとの話である。

一般、学生、会員、同窓会連合会の役員の皆様の沢山の方(50名)の参加をいただ

きました。お礼申し上げます。(葛貫記)

### 新入会者の紹介

茨城学習センターの2005年度卒業・修了生は30名です。その内、下記8名の方から茨城同窓会への入会申し込みがありました(3月31日時点)。

NO	氏名(敬称略)	住所	専攻
1	鶴谷 泰洋	ひたちなか市	
2	ホシノ ヨウコ		
3	匿名希望	かすみ がうら市	生活と福祉
4	長谷川初枝	土浦市	発達と教育
5	齋藤 保	いわき市	自然の理解
6	石井 衛	かすみ がうら市	生活と福祉
7	小瀬 裕男	日立市	自然の理解
8	吉村 政一	稲敷郡	自然の理解

### 「水戸の歴史と文化を訪ねてー徳川光圀を中心に」に参加して

人間の探求専攻 加澤 弘大

水戸の歴史と文化を訪ねては、徳川光圀公の偉業大日本史の編纂の舞台である西山荘、又水戸学の学校である弘道館の見学、光圀生誕の地、また、その由来のエピソードなど盛り沢山の楽しい研修会でした。

光圀生誕の地は、実は線路の上だったとのこと。観行で訪れて誕生の地と書かれているところには、小さな神社がありました。訪れる人は、そこを光圀公の生まれた場所と思い手を合わせていますが、縁りの神社はすぐ先の三木家の土地にあったそうです。

次に弘道館を見学。文武両道を鍛え、医学、薬学、天文学、蘭学を幅広く学習に取り入れ、水戸藩の優秀な人材を育てた。その後、幕末尊皇攘夷論の中心をなした学問所。徳川斉昭公が創立し、慶喜公も学んだ。光圀公とはあまり関係ありませんが、後者は先人に習ったものと思われる。大日本史編纂の学問所の跡地は、現在は、水戸市第二中学校でした(彰考館)。

薬医門は、水戸第一高校の中にあり、位

置的には城の敷地内なので、その奥には、城の出入口があったかと思いきや一度違う場所に置かれて、昔の城のあった近くへ戻したそうです。薬医門の正確な意味は不明で今後の研究課題かも知れません。

佐竹時はこの地に繁栄していた佐竹氏が470年間、この地を治めていたそうです。徳川家康によって、秋田へ領地替えされ飛ばされたそうです。秋田と茨城で文化交流をすると面白いかも知れません。

西山荘は、大日本史を静かに本として纏める光圀の隠居所。お茶を一杯頂き心が落ち着きました。水戸徳川御所焼きに習い、抹茶碗を自分で造り学習センターで受け取る企画があるとよいと思いました。



県立歴史観での研修は今までの復習と茨城の風土についてでした。何回か足を運んで見たいと思いました。特別展は、祭り万華鏡、茨城の年中行事その変様でした。

最後に、黄門様宴膳体験は、希望者のみでしたが、黄門様も戴いたという健康食にもなりそうなご馳走を戴きながら、今日一日を振り返り話が咲きました。

### 中国旅行記

人間の探究：平成15年業：松本和雄

北京、西安 6日間(2005年5月10日～15日)の旅に、妻と義姉の3人で出かけた。以下、旅行の概要及び見聞した内容を記す。

若き日にシルクロードのロマンにあこがれて歴史的興味を持って接してきた。今回で6回目の中国渡航となる。

2004年12月の中国桂林旅行をしたおり、『今度は北京と西安に行きたいね』という話になった。時節は暑くもなく寒くもない5月頃を目標とした。2月初旬より「クラブツーリズム」の個人旅行担当とコンタクトした。見積も

りなどを取って費用検討したら、パック旅行とそんなに変わらない事が解ったので、ゆっくりと見学時間が取れる個人旅行を選んだ。

ところが4月に入って北京、上海、瀋陽などで抗日デモが発生、大使館や領事館が襲撃される事件が起きた。4月17日に「町村」外相が北京で中国「李」外相と会談するも双方原則論に終始している。中国の伝統的な外交方針は日本に謝罪することは先ずないだろう。担当者に問い合わせたところ、会社としては、外務省海外旅行情報も渡航制限はしていないし、旅行者が直接被害に遭っている事例もないので、旅行は実施中とのことであった。出発予定日より1ヶ月以内に入っているのでキャンセル料は20%とのことである。

私は、新聞報道、テレビ報道番組を良く読み聴くことにし、更に放送大学専門講座「現代東アジアの政治」を学習中であるから、いろいろ自分なりに分析して状況を把握した。このデモの主な原因として、中国共産党の愛国教育の結果があって、加えて国内矛盾のいろんな不満がマグマのように溜まり、一部の若者達の過激な行動になって現れているのではないかと、更に中国共産党が、体制維持に危機や矛盾を感じる度に、これからも反日感情を利用することになるのだろうと分析して、そのデモ現場にさえ近付かなければ、旅行者にはさほどの危険はないだろうと判断した。因みに中国への観光客は5月当月で2万人ぐらいの人が、キャンセルなどの措置を執ったとのことである。

心配していた反日運動も小康状態になった。ジャカルタでの「小泉」首相と「胡錦濤」主席の会談も実施された。北京での「5・4運動記念日」(1919年、北京の各大学の学生が抗議集会を開き、さらに21カ条条約破棄、青島返還を叫んでデモ行進を行った)も何とか無難に乗り切っているようだ。中国政府も国際社会からの非難を恐れているのだろう。これしきの統制が出来ないで一大イベントである北京オリンピック開催など難しいことだと思う。

見聞した北京と西安の印象を列記してみよう。

(1)日本人観光客は予想していたように本当に少なかった。そして、遠慮がちに静かに観光していた。私達も控えめな態度で歩き

回ったが、『ジャパニーズ』と聞こえがちに言われた事もあった。私はぐっと振り向いて、その人を確かめた。どんな感じの人が言うのか確認したかったからでもある。

(2)対日デモについては、「えん閻ガイド」の説明によると、北京デモで暴れたのは本来の市民ではなく、よそ者であったらしい(市民の400万人ぐらいが外部の人とか)。その意味では確かに首都北京滞在の印象は悪くはなかった。そして対日感情は西安市の方が悪いように感じた。

(3)西安市で夜間外出をしようとしたが、ガイドから止められた。こんな大都会でと意外に感じたが、デモの影響が色濃く残っていた。

(4)北京市内で立ち寄った商城(ショッピング・センター)の品物は高級品が豊富に陳列されていたが、値段も日本と同じぐらいであり、改めて北京市民の購買力の向上を実感した。

(5)ホテル近くのスーパーまで、買い物に行った。此处はやはり安い雑貨品が陳列してあり庶民生活の匂いがした。商品陳列の仕方日本と変わらない。レジで200元(100元\*2枚)を出したのだが、一枚一枚丁寧に「偽札判別機」に掛けている。私達が日本人だからなのかとその時は気分を害した。しかし帰国してから新聞記事で知ったことだが、中国では昨年1年間で人民元の偽札や偽硬貨が過去最高規模の11億6千万元(約150億円)に上り、今年は「反偽貨幣工作年」として、政府が力を入れていたのだ。人民元100元(約1300円)の製造単価は5~6円という安さが犯罪につながっているようなのである。

(6)西安市内ではアパートの窓から竿を出して洗濯物を干す光景が未だ見られた。北京市内では規制が厳しく室内で干すようになって、外で干す光景は殆ど見られなくなっていた。やはり内陸部では規制が少し時間的に遅れるのだろう。

(7)義務教育である小学校、中学校の教育費用は政府の補助は無く、全部費用が両親の負担になって、教育費の負担が重い。因みに小学入学に2千元(約2万6千元)かかると言っていた。社会主義国家の義務教育なのに意外な面を知ることが出来た。

(8)若い人の子供が少ない理由は、一つに

教育費が大変だからだという。また出産費用は1万3千元(約17万円)かかるのでその負担が大変だと言っていた。

また一人っ子政策のため、2人目に生まれた子供は「ヘイハイズ黒孩子」と言って、ずっと戸籍がないことがある。そして小学入学頃入籍するのだそうだ。中国の人口は正確には判らない訳である(少数民族の人口把握も含めて)。

(9)1990年代になって保険制度が改正され、個人負担が大幅に増えたので、病気になっても入院できない人達が増えた。その為費用の安い民間療法が増えたとし、さらにスポーツセンターなどに通う人も増加した。我々に馴染み深い「太極拳」は若い人達は「老人ダンス」という。

(10)「張ガイド」の話によると、日本製の家庭電気製品に対する信頼度は高い。実際に実家で日本製電気冷蔵庫を約20万円で購入したが(当時月収は6千円位とか)、20年間故障無し、と言っていた。国産品は未だそのレベルではないが、最近「ハイアール」製など良い物が出てきたという。

(11)西安市では、北京オリンピックは市政府から何の情報もないから殆ど関係ないだろうと言っていた。競技会場も設置されるわけでもないから、通常通りのようだ。未だ時間があるから一般市民に浸透するのはこれからことだろう。



### 編集後記

今回、加澤様(学生)から、記念事業に関する寄稿、松本様から中国旅行記を寄稿いただきました(原稿:2005年5月受付)。ありがとうございました。

(編集委員:猪膝、井下、葛貫)